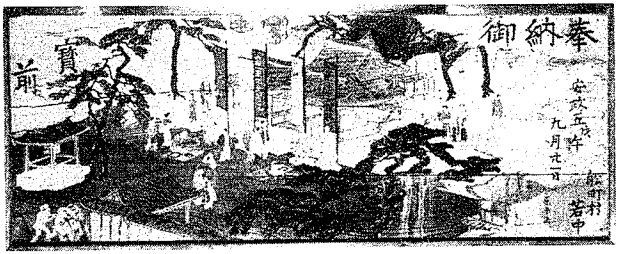
加古川市史 第五巻
付録
年報 2
昭和62年3月
加古川市
企画部 市史編さん室

播州地方の祭礼絵馬
——上之庄神社と神吉八幡神社の祭礼図絵馬——

国立歴史民俗博物館
教授 岩井宏實

近世になると、絵馬の図柄は多彩となり、生活の全領域にわたる事象が描かれるようになる。暮しの安泰を願い、かくあれかしと願望する内容を描いたもの、多難な事業を為し遂げたとき、その仕事の内容を描いたもの、悦び事のあったとき、皆と悦びを分かち合うため描いた記念の絵馬など、その種類はきわめて多い。そうしたなかに祭礼図絵馬がある。

祭礼は共同体における最大のハレの行事である。人々はすべてこの日のために働き、祭礼を迎えると全身全霊を注ぎ込み、沸き立ち賑わう。その情景を描いて神に捧げ、敬神の意を表し、神の恵みあらんことを願ったのが祭礼図絵馬である。そのため、包み隠すことなく有りの儘の姿を描いていて、奉納された当時の祭礼の有様を具体的に知るこ



上之庄神社　祭礼図絵馬

とができる。

上荘町井ノ口の上之庄神社には、安政五年（一八五八）に奉納された祭礼図絵馬が二面伝わる。一面は祭礼のときの社殿を描いたもので、拝殿前に「若一王子大権現」の幟が五旒立ち並び、正装した男女が三々五々神前に歩を進めている。また境内末社の小祠にも足を運んで額く人の姿も見える。さらに境内には店出しも見えるし、裸で褌姿の数人の男がなにやら揉み合ってるかのような場面も見られる。静かなたたずまいであるが、かえって荘厳さを漂わせている。この絵馬は安政五年九月二一日、船町村若中によって奉納されたものである。

もう一面は、同じく船町村若中による奉納であるが、行列の情景を克明に描くものである。横長の画面を雲形によってさらに上下二段に分けて、画面上段左から右へ、そして下段の右に続いて左へと行列の流れを描いている。鳥居を出たときの行列のさまを描いていて、いちばん先頭の御幣を捧げた裃姿で帯刀した男が八人、つぎに依代を捧げ持つ男、若一王子大権現の幟を持つ男、鉾を持つ男、鈴（神楽の採物）を三方に載せて持つ男と巫女、さらには僧侶二人、挟箱持ちも加わる。ほかに数人の男、先払いの天狗（猿田彦）が棒を持って行列の間を走り、見物の男女や旅の男、行商らしき男の姿も見える。下段に続いて幣を持つ子供たちと天狗（猿田彦）を先頭に、獅子神楽の一団がすすむ、大きな長持の上に屋形をのせ、そこに獅子頭を安置し、太鼓を傍らにのせ、「若一宮」の幟を立て、その長持を二人の男が舁き、一人が太鼓を打ち鳴らし、その周りを数人の男が囃しながら歩む。この数人は獅子舞をする太夫たちであろう。これにも見物人らしい男女・子供が従っている。そのあとを二〇余人の男が勢いよく、大きな蒲団太鼓を舁いで賑やかに練り歩く。最後尾は御幣を持った四人の男、弓矢を持った二人の男である。この弓矢の二人がいままさに鳥居を出たところである。実によくまとまった見事な行列である。

ところで、この図から注目される問題点がいくつか見出される。まずこの行列には神輿が見当らないことである。神霊が口覆いをした男の捧げる樹枝に依っている。この姿は日本の神幸の古態である。つぎに、行列の中に神霊の依代に続いて巫女のいることである。一般に巫女が神幸に加わることは少ないのであるが、ここでは神幸に加わっており、しかも中心的な位置にいる。これはたんに湯立をし神楽を舞うだけの神楽巫女ではなく、「惣の市」と称された、神の託宣をし神人の媒介をする重要な役割をもった巫女であろうと思われる。第三に僧侶が行列に加わっていることである。上之庄神社もかつては寺院と大きくかかわり、神仏習合の風をもっていたのではないかと想像される。第四には蒲団太鼓の前に獅子舞の一団のいることである。この

一団の擁する獅子屋形は、伊勢太神楽が回国巡行するときの屋形である。今日、伊勢太神楽の集団は三重県桑名市太夫町に住し、回国巡行しているが、まったく同じ屋形を用いており、大阪府守口市寺方元町の産須那神社に伝わる、江戸中期頃の伊勢太神楽の姿を伝える絵馬に描かれる屋形も、上之庄神社の絵馬に描かれる屋形と同じである。こうしたことから見ると、上之庄神社の祭礼のさい、伊勢太神楽の一団がやってきて祭礼の一役を担ったのかも知れない。

上之庄神社　祭礼図絵馬（部分）

神吉八幡神社祭礼絵巻（部分）　右―母衣花　左―白幣・小頭人

「播州獅子どころ」といわれ、地元における獅子舞はきわめて盛んであるが、それらは太神楽系の獅子舞の多い点からしても、その発展には伊勢太神楽の関与があったものと推察できる。

西神吉町宮前の宮山に鎮座する神吉八幡神社の祭礼図絵馬も伝わるが、剥落がひどいために図柄の詳細については判らない。しかし同社に伝わる文政三年（一八二〇）の祭礼絵巻に描かれる行列図と同じ場面が見られるので、ここでは絵巻物を参考にして図柄を考察せねばならない。

絵巻に描かれる祭礼行列は実に豪華で、小頭人を中心とした行列、大頭人を中心とした行列が克明に描かれている。ことに衣裳から持ち物にいたるまできわめて詳細で、その全容を知ることができる。いま絵巻の図柄の考証は省略し、絵巻の上段随所に記された注記を追って見ると、御先太鼓（天幕猩々緋、蒲団屋根）、猿田彦（上緋縮緬）、母衣花（凡百人斗、二歳より一三歳迄）、弓弐張、鉄砲弐挺、台笠、立傘、挾箱、白幣、小頭人、警固、太刀、鎗、長刀、床机、茶弁当、小太鼓、大頭御先太鼓（天幕黒天鵜綾、蒲団屋根）、猿田彦（上緋縮緬）、母衣花凡百人斗（二歳より一三歳迄）、御弓二張、鉄砲二挺、長柄鎗、毛鎗、鉾、太刀、徒士、金幣、神輿（八角）、警固、御検所御役人、別当（宝林寺）、神子、白幣、大頭人、供尾人、家子、警固、太刀、徒士、鎗、台笠、立傘、挾箱、茶弁当、合羽籠、小太鼓の順である。この絵巻に描かれた人数を当ると総勢二六〇余人であるが、注記に母衣花は「凡百人斗」とされているところ、実際画面では大頭・小頭ともそれぞれ二七、八人しか描かれていないので、絵巻の注記どおりに見ると四百人におよぶ大行列であったことになる。

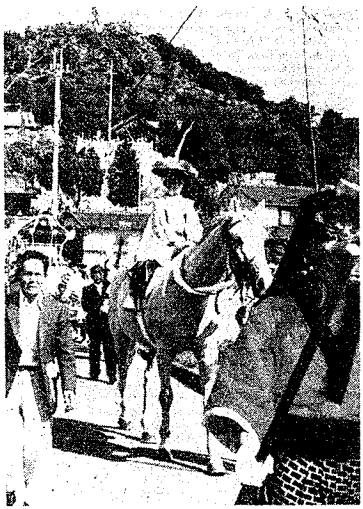
絵馬の図柄でどうにか見られる部分を見ると、弓を持つもの二人に鉄砲を舁ぐものが続き、そのあと長柄鎗二人、

絵巻（部分）大頭人・白幣・神子

毛鎗二人、鉾二人、太刀一人に徒士二人が続き、金幣を捧げる冠・狩衣姿のもの一人、それにシデを振る男が二人後を振り向きながらシデを振っているところがある。この図柄は絵巻の大頭人の行列の母衣花に続く一連の図柄と構図も人物の姿態もまったく同じである。

またある場面では、数人の男に続いて駕籠が行き、それを数人の男が舁いでいる。その後に頭に飾りをつけたような人物が一人いて、幣を捧げ持つ男、騎馬の冠・白衣姿の男、徒歩の冠・白衣姿の男二人、さらに数人の男、鎗、台笠、立傘のようなものが黒く見える。この場面も絵巻と照合してみると、ちょうど御検所御役人袴姿帯刀の七人、それに続く別当宝林寺の駕籠と、それを舁く七人の駕籠かき、頭に飾りをつけた人物は冠をいただいた女性すなわち神子である。そして冠・狩衣姿の男が捧げる白幣、騎馬の男は冠に白の狩衣姿で、これが大頭人である。それに続く二人の男は大頭人と同じ装束の供尾人と家子で、そのあと袴姿の警固五人、太刀持ちの子供一人、陣笠、帯刀姿の徒士二人、鎗持ち一人、台笠持ち一人、立傘持ち一人に該当する。これも絵馬の画面が剝落しているので明確な輪郭はわからないが、ほぼ構図のうえで一致する。こうしたことから考えると、この絵馬は文政の絵巻の図柄と同じということになり、どちらが原図になるかは不明であるが、おそらく絵巻をもとに絵馬が描かれたのではないかと想像され、絵馬の描かれた時代も、絵巻と同じ文政年間ころではなかろうか。

ところで、今日の祭礼渡御行列は、御先太鼓二人、金幣一人、母衣花一〇人乃至一五人、御徒士一〇人、御幣一人、頭人一人、猿田彦二人、シデ振り一五人乃至二〇人、神輿二〇人、猿田彦二人、神官一人、警固五人乃至六人で、江戸時代の行列にくらべてきわめて小規模になっている。しかし母衣花の行列はなお美事である。桜の花形に切った紙を竹でつくった台にさしたものが母衣花で、役に当ったものが各自手作りし、これを手に持って行列に加わる。この花をいただくとゲンがよいといい、行列の最中に沿道の人々が花を取り合い、家に持ち帰り、枝を丸くして床に飾る。



小頭人の行列　昭和61年秋
（宮前町内会提供）

またシデ振りも行列の中心的存在となっている。古くはシデ振りは、小頭人の行列、大頭人の行列の先頭に二人ずつであったのが、人数がいちじるしく増え、一つの集団となっている。小学校三、四年生のものがつとめ、浴衣で化粧まわしをつけ、竹の先に幣をつけたものを持って振る。シデ振りのなかでいちばん大きなシデを持ったものをオオシデといい、最年長のものがこの役につく。

御徒士も小学生男子がつとめるが、陣羽織・袴・陣笠という出で立ちで、弓、鉄砲、槍、毛槍などを持って行列に加わるので、かつての小頭人の行列、大頭人の徒士のそれぞれの半数以下にはなっているが、いちおう徒士行列の形は保持しているものといえる。

この行列は本社から大国の下宮（御旅所）まで渡る。宮前から神吉、中西、西村、大国の順で、各ムラの広場に立ち寄りながら進み、御旅所に到着すると「神輿の式」があり、休憩ののち本社に帰る。帰路には大国から中西、神吉、宮前で、到着するとふたたび「神輿の式」があって祭礼が終るのである。

郷土を知る
佐伯廃寺の鐘

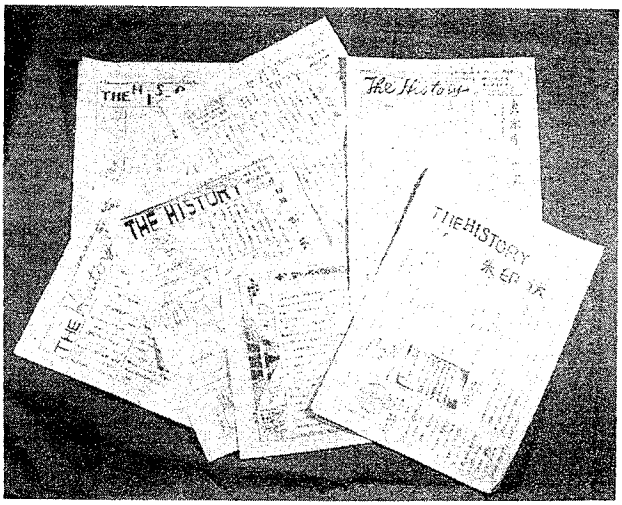
神吉中学校郷土歴史部
顧問　伊賀なほあ

神吉中学校に郷土歴史部をつくったのは三年前（昭和五九年四月）のことで、創部にあたり部員勧誘の話を体育館でするとき〝入ってくれる生徒がいるかしら〟という不安がありました。幸いにして数人の生徒が入部、四月下旬から部活動をはじめ校区の寺や神社に行ったり地域の人から話を聞くことを中心にし、理解しえたことをまとめ、部の新聞"THE HISTORY"に書いて校内に掲示しています。

今までの調査の中で生徒共々一番大きな喜びを得る事のできたのは升田地区にあった佐伯廃寺の鐘を三木市の慈眼寺でみつけたことでした。

升田地区の中ほどに佐伯寺跡と伝えられる場所（現在公園）があり、そこに佐伯廃寺の存在を示す石造りの多宝塔

が建っています。過日、神吉の池沢弓吉さんからいろいろお話を伺ったとき、この廃寺の鐘が三木市にあると聞き、調べてみると慈眼寺（三木市久留美）にあることがわかり、この寺を訪問しました。禅寺の深い緑の中に深緑のサビ色をした立派な鐘、「播州印南郡益田村佐伯寺鐘　延慶二年四月一四日　大工伊豆宗友」の銘を確認したとき〝みつけたぞ！〟の気持ちでした。銘文はかたい先の尖ったもので切りこんだような躍動した文字で、一部は傷がついて判読しにくくなっていました。



新聞 THE HISTORY

再度の調査では寺の好意で鐘に薄紙をあて鐘を痛めないようにやわらかい鉛筆でこすらせていただき、判読の作業をして、これらの成果を新聞七号にまとめあげることができたのは調査後三ヵ月以上たってからのことでした。

この調査をつうじて、今は静かなこの地に鎌倉時代、佐伯氏という有力な武士がおり、立派な氏寺を建立し、室町時代の混乱のなかで滅び、鐘は三木に、本尊や仁王さんの目は同地区の妙願寺に、多宝塔は公園にあることがわかったのです。

その後も酒造、砂部遺跡の発掘体験、常楽寺の朱印状、学童疎開の体験談、石仏、祭りのことなど、郷土のことを数多く調べました。これらをつうじて神吉には多くの遺物・古文書・物語があり、これらは私達の祖先が何を考え、生活してきたか、何度も戦乱や飢餓の修羅をくぐりぬけてきたかをいきいきと語りかけてきます。

神吉は新しい住宅もたち人口がふえつつありますが、その一方では親から子へ文化が伝わりにくくなっているようです。多くの人が地域に関心をもち、もっと調査がされていくならば新しい事実もみつかることでしょう。

市史第五巻執筆者紹介

八木哲浩

一九三二年生まれ、龍野市出身、東京大学文学部国史学科卒。神戸大学名誉教授。『封建社会の農村構造』（有斐閣）・『近世の商品流通』（塙書房）など近世政治・経済に関するすぐれた著書が多い。兵庫県史をはじめ県下各市の市史を手がけ、現在、加古川市・姫路市の市史編さん専門委員長。第一回神戸史学会賞・昭和五八年度兵庫県文化賞・昨年神戸新聞平和賞受賞。

今井修平

一九五〇年大阪府生まれ、大阪大学大学院（博士課程）修了。現在神戸女子大学助教授。著書に『大山崎町史』（共著）、「近世後期河内における木綿流通の展開」（『近世大坂地域の史的分析』御茶の水書房）、『姫路市史』第一〇巻（分担執筆）などがある。加古川市史・姫路市史編さん専門委員。

編集だより

第五巻の刊行が諸般の事情により大変遅れ、購読者の方々にご迷惑をおかけしましたことをお詫び申し上げます。

この第五巻は近世の史料編となっており、本編となります第二巻に対応する史料編であり、市内外の史料調査で見つかった明細帳・村絵図等にかなりのページをとり、村ごとの歴史をより理解しやすくなっています。

また第五巻の編集段階で市民の方々に近世の歴史に、より興味を持っていただくために、開館して間がない加古川総合文化センターにおいて「特別展　近世加古川の村絵図　庄屋のくらし」を同館と共催で昨年九月二七日～一〇月二六日の約一カ月開催し、図録の発行および八木委員長による特別展記念講演などを行いました。

市民の方々に、加古川市域及び周辺の歴史をより身近なものにしていただくため、広報かこがわに「加古のながれ」の連載などもおこなっており、その一環としての意味もあって、特別展を企画したわけですが、芳名録を見ますと市外の方が意外に多く、関心をお持ちいただいている範囲の広さに意を強くしております。

今後も発刊計画に沿って順次進めてまいりますが、最大のネックは何と申しましても史料の不足です。古文書、古記録、写真などが豊富であれば、それだけ内容の充実した、より意義のある市史を作ることができますので、所蔵者の方々のご協力を心からお願い申しあげます。

次回の第三回配本は「『市史第一巻』本編Ⅰ」（地質・地理、考古、古代、中世）です。